二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

みこみこ！

誰にしようか神様の言うとおり

小説 狩野　景
挿絵 tsuina

序章　たのしいなつやすみ　006
第一章　みっこみこな三姉妹　009
第二章　巫女姉の言うとおりっ!?　051
第三章　濡れた紅巫女……!?　080
第四章　恥じらいの妹巫女　109
第五章　温泉えっちはほどほどに　151
第六章　誰にしようか、巫女三姉妹　207

登場人物紹介

Characters

籠ノ目 瑠紅（かごのめ るく）

籠ノ目神社の次女。厄災を祓う陽の力を司る巫女。勝ち気で怒りっぽくツン気味。

籠ノ目 雫（かごのめ しずく）

瑠紅の姉。病魔を祓う陰の気を司る巫女。無口で無表情でおっとり天然ボケ。

籠ノ目 未來（かごのめ みく）

瑠紅の妹。自然との調和を図る和の気を司る巫女。優しく恥ずかしがり屋。

伊知羽 和志（いちば かずし）

瑠紅の従姉妹にあたる少年。面倒くさがり屋で女心に疎い。

『第四章　恥じらいの妹巫女』より

「み……く……!?」
物静かで控えめな少女がそんなことを考えていたなんて、思いもしなかった。愛おしさが込み上げる中、しかしと戸惑ってしまう。
（俺、雫姉とセックスしちゃったんだし……。断らなくちゃだめ、だよな……？　で、でも……。どうしよう……）
大好きな巫女姉妹の長女の神秘的な美貌が脳裏に映る。なぜか、ちょっと苦手だが憎めない次女の、山小屋で見せた寂しげな童顔まで浮かび上がった。その二人に重なるように、見開いた瞳を潤ませて顔を真っ赤に染め訴えかけてくる未來の可憐な姿に見とれる。
「雫ねえさまとも、瑠紅ねえさまとも、えっちしたんですよね？　だ、だったら、ボクとも、えっち……してくださいっ!!」
困惑する少年へと、心が張り裂けそうな声で訴える。
「ち……違……ッ！　瑠紅とは……」
セックスするには至らなかった。だが確かに幼い頃から大好きな雫の誘惑を受け入れたのは事実だ。そんな生々しいことをはっきり説明するべきかと口ごもってると、
「――ボクだけ、子供扱いなんて、……イヤですっ！」
仰向けの和志の上へと、身体を投げ出し覆い被さってくる。
「おわっ！　未來っ!!」
潰れそうに押しつけられた巨乳房が、ぱるんっ！　と掌から弾け出た。だがその反動で

水風船のように暴れながらもう片方の膨らみと共に、すぐに少年の胸板へと密着しぶにゅるっ、と撓わな質量を柔らかく拉げさせる。心地よい重みと熱く火照った体温に捕縛されたかのように、和志は拒むことを忘れて未来に抱擁されるままとなってしまった。

「かず、にいさま……。――――好き……ッ」

啜り泣きくようなか細い一言に、心臓が鷲掴みされた。恥ずかしがり屋で内気な従妹が勢い任せとはいえここまで大胆に振る舞うには、どれだけの勇気がいることだろうか？それを思っただけでも、彼女の思いは無下には出来ない。

（そう……なのかも……。雫姉だけを好きなんじゃなくて、俺……。すごく調子のいいことなのかもしれないけど……。だって、未來に想われて、こんなに嬉しいんだからっ！）

都合のいい言い訳に思えるかもしれないが、いままで自分でも気がつかなかった己の本心を、この従妹の告白が気づかせてくれた。

「お……俺も……未來のこと、好きだからっ!!」

「――!!　に、にいさまっ！」

嬉しいときにもおかっぱ髪の従妹は顔を真っ赤に染め、泣き出しそうに瞳を潤ませていた。驚きと喜びをその満面に浮かべて、むしゃぶりつくように和志へと唇を重ねてくる。

「ん……ッ！」

逡巡したらもう二度と勇気が奮えなくなるに違いない。突っ走る感情に任せ本心の求めるがままに迫ってくる少女のがむしゃらな口づけを受け入れる。ねっとりと熱い吐息が唾

液に混ざって口中へと流れ込んできた。無我夢中で押しつけてくる唇は蕩けるバターの柔らかさで和志の唇に張りついて、震えるような微かな蠢きを繰り返す。

（み……未來と、キス、しちゃった……）

妹のように思っていただけに、手をつないだり頭を撫でてやったりはよくしてあげたが、抱きつき癖のある雫や、喧嘩紛いのじゃれ合いをする瑠紅に比べればスキンシップは控えめだった。そんな彼女と大人同士の触れ合いを交わしていることに妙な興奮が芽生える。

「にい、ひゃまぁ……。ん、ふ……ぁ……。は、……ぅ……ん……」

うぶで耳年増な知識に染まっていないため、舌を入れることすら知らない。ひたすら唇の触れ合う心地よさに陶酔して、くちゅくちゅと唾液の音色を微かに響かせながら未來は上擦った喘ぎを漏らす。相手の首に腕を絡めるような誘う態度を取ることも知らず、軽く握った手を和志の肩に添えて身を寄せる。荒い吐息と唇を交わらせる内に思い出したかのように、緑袴の巫女娘はその指で彼の手を取ると、撓わな胸房へ導こうとした。

「――未來ッ！」

指先をめり込ませる熱帯びた柔肉にハッと我に返った。名残惜しさを感じながらも、つたないくせに熱烈な口づけから唇を離す。

（未來と……もっと、したいけど。こ、ここじゃ……）

彼女にのしかかられながら、和志はいまさらのように辺りを見回した。草むらの中とはいえ小道からほとんど離れておらず、誰かが通りかかればすぐに見つかってしまうのは確

実だ。いまも唇を重ね少し身をくねらせただけで長く伸びた草が不自然に揺れて、そこに誰かが横たわっていることを知らせてしまう。しかももう一つの悩みが和志を困らせていた。

（また、視線強くなったな……。はっきりとこっち見てる！）

これまでも巫女姉妹の誰かといい雰囲気になると、山の方から常に少年を見張っている気配が急激に強さを増していた。まるで側から覗き込まれているような気配に、思わず顔を上げなにもない空間を睨みつけてしまう。

「ごめん、未來。やっぱりここだと、ちょっと……」

恐らくいまやめてしまえば、そのままなんとなくうやむやになってしまうのだろう。決死の勇気を振り絞った未來がもう一度迫ってこられるようには思えないし、一度冷静になってしまえば、自分も彼女のことは妹程度にしか接せられなくなってしまいそうだ。膨れ上がった彼女への思慕にこのままなりふり構わず突き進んでしまいたいと思いながらも、理性がやめた方がいいと囁きかける。自分はともかく、こんなところをもし村人に見つかってしまったら、未來の繊細な心は耐えられるはずもない。そのことを思うと……。

彼女の手を優しくどけて、細い肩に指をかけ身を起こさせる。

「――!?　にい……さま……？」

なぜと、愕然の眼差しで従兄に訴えかけながら、和を司る緑袴の巫女は彼の視線がちらちらと窺う先にハッとなる。

「……かずにいさま、気がついて……っ⁉　大丈夫です、あれはボクたちを見守ってくれている御籠目（おかごめ）さまだから……」
「――御籠目さま……って。まさかっ‼」
思いも寄らぬときに得体の知れない視線の正体が分かった。未來たちの家である籠ノ目神社。そこに祀られている土地神こそが、その御籠目さまである。
（なんでそんな神様が、俺を⁉）
それなりに霊感が強く、この世に在らざる者には何度か接触したことがある。それに加え巫女従姉妹たちの超常的な能力まで見せられたいま、土地神の存在を疑う気はさらさらない。ただなぜその御籠目さまが自分などを見張っているのかが不思議でならない。
「ボクたち護女とにいさまが結ばれるの、誰よりも望んでいるの御籠目さまだから……。あとで、だなんてダメなんですっ‼　ボクももう、我慢するなんて、ヤダから……ッ！」
消え入りそうな声ながら、込められた想いの強さが感じられた。彼女自身も分かっているのだろう。いまを逃せば、次はもっと勇気を振り絞らなければいけないことを。
上体を押し戻されまた、仰向けの従兄へ馬乗りになった未來が、汗ばんだ白衣の袖をはためかせ神楽鈴を振るう。
――リン、と軽やかな音色が大気に満ち、土へと降り注ぐ。その途端、緩やかな風にそよいでいた青草がむくむくと物凄い速度で成長し始めた。
「――未來ッ！　こ、これ……‼」

薄く瞼を閉じ陶然とした表情で両手を緩やかに踊らせ、透き通った祝詞の詠唱を空に溶け込ませる。驚く和志の前で、青草に加え木々の枝や蔓までもが二人の周りで渦を巻いて絡み合ってゆく。ほんの数秒も経たぬ内に、草木の織りなすドームが和志と未來をすっぽりと取り囲んでしまっていた。

「す、すごい……」

少女の甘い体臭と入り交じった青臭い草花の香りが濃さを増した。完全に外は見えなくなってしまったというのに、陽光がほどよく差し込み巫女娘の可憐な顔を瑞々しく飾る。

「――外からだと、草藪にしか見えないから。音とかも漏れないし……」

中にいると草むらの不自然な盛り上がりがかえって目立ってしまうのではと思うが、恐らく外から見た印象はかなり違うのかもしれない。音が外に漏れ出ないという仕組みからも、なにか彼女の不思議な力が働いているのだろう。背中の下にも潜り込み、クッションの柔らかさで枝が身体を支えてくれている。

（こんな……植物を、自在に操るなんて……ッ！）

自然との調和を司る和の護女の、想いの強さが草木に伝わったのだろう。内気な従妹の姉たちより優れているかもしれない能力の強さに驚くと共に、和志の胸がときめく。

「これで、ボクと、好きな同士のすることが、出来ます……」

「あ、ああ、未來……」

想いは同じだった。一瞬にして成された外界からの隔離が少年の様々な躊躇いまで断ち

切ったのかもしれない。能力の発動に軽く息を乱し、火照った顔に汗を滲ませた少女を今度は自分から抱き寄せなければと上体を起こす。だが、草木を意のままにする和の護女の力はまだ威力を発揮していた。

「――んっ？　み、未來ッ！　こ……これっ⁉」

何本かの細い蔓が、少年の下半身に迫っていた。抱き止めようと伸ばしかけた腕から遠ざかるように腰を浮かせて未來が後ずさる。温かく汗ばんだ尻の密着を失い、物足りなさを覚えてしまう。草蔓はその和志の勃起で張り詰めたジーパンへと絡みつき、ファスナーを一息に引き下ろしてしまった。

「――ほわっ‼　なにっ⁉　うわっ、うわわぁあっ！」

慌てて押さえようとしたが時すでに遅しだった。袴の下の熱尻に圧迫され膨張の極みにあった肉太は、溜めに溜めたエネルギーを解放された出口へと一気にぶちまける。

――びゅるりゅんっ‼

さらにファスナーの内側にまで忍び込んだ蔓草にトランクスの前を開かされて、赤黒く充血したぱつんぱつんの勃起肉が弾け出た。

「ひうぅっ‼　あ、ああ、あぁ……ッ！」

カウパーのヌメリをまんべんなく纏い肉傘の先端を鈍く尖らせたグロテスクな太棹が、絶え間なくビュクビュクと脈打ちながら表面に幾本もの青筋を浮き立たせる。

「に、いさま……の、こ……。――ッ、これが……。おちん……ち……」

初めて目にした牡の本性を具現化した凶暴な固まりに、あどけない顔が恐怖で引き攣る。魅惑のプロポーションを誇る早熟な肢体も、小刻みな震えに見舞われていた。

恐らくもう少し可愛らしいものを想像していたに違いない。多分、幼い頃彼と一緒に入浴して垣間見たイメージがそのままいまも変わりなく脳裏にあったのかもしれない。

怖いものから目が離せなくなったかのように、裏筋が刻まれた鏃型の亀頭を凝視する内に、上気していた顔から見る見る血の気が引いていってしまう。

「ご、ごめんっ！　未來っ‼　こ……こんなものをっ！」

怯えを浮かべた黒目がちの瞳は涙をいっぱいに溜めもうこれ以上、勃起肉を見ていられそうにない。意地汚く甘美を求めて充血し続ける極太を、両手で包み込んで彼女から隠す。

「――だ、大丈夫……ですっ‼」

だがその寸前、従兄の言葉におかっぱ髪の巫女妹がビクンと打ち震える。赤黒い肉竿をもう一度見つめ、不安げに顔をしかめながらも上擦る声できっぱりと告げた。そして自分から白衣の胸元を両手で押し広げ、膝立ちの姿勢から屈み込んでくる。

「未……來……？　な、なに……をっ⁉」

はだけた巫女服から、いとも簡単に大きすぎる白美球が、ぷるりゅんっ！　と溢れ出た。その勢いで薄いピンクのブラジャーがいまにも外れそうなほどズレて、もう少しで乳首が見えてしまいそうだ。窮屈な衣服から解放され奔放に弾んで悩ましく拉げる熟れ肉を、今度は和志が凝視する。ただし喜びに爛々と瞳を輝かせながら。

いったいなんのつもりなのか？　従兄の問いに答えぬままで、袴が捲れ返ってブラとお揃いの桃色ショーツが覗く尻を高々と突き上げ、上体を彼の上へと沈めてくる。
期待と困惑に動けず見つめていると、こともあろうに巫女娘は撓わな膨らみのむっちり押し寄せた谷間へグロテスクな勃起男根を挟み込んでしまった。
「なっ‼　――み、みぃくっ！　く、ふ、はぁあああぁうっ‼」
些細なことがなにもかにも吹っ飛んだ気分だった。熱く汗ばんでぷにゅぷにゅと形を歪ませる蕩けそうな柔肉に、すべてが包み込まれた気分になった。
（そん……なっ！　おっぱいで、俺のちんぽ……をっ‼　ふぁあっ、あ、あぁぁあぁっ！）
敏感な箇所で密着するきめ細かな肌の感触が狂おしい。
「だめ……だっ！　こ……こんな、ことっ‼　未來ッ！　無理……する、なっ‼」
キスで舌を入れることすら知らない少女が、初めて見る男根を房の谷間に挟み込んでくれた。危うく射精してしまいそうになりながら、すんでのところで堪えて事なきを得る。
「無理……なんかじゃ、ないですっ！　ちょ、ちょっと……その、びっくりしただけ、だから……。ボ、ボクのおっぱい、おっきいから……こうすると、いいかな、って。ど、どうです……？　かずにいさま……」
処女娘が抱くペニスへの恐怖感はなかなか拭い去れないだろう。声を震わせながらも、意地を張って勃起肉を挟んだ双房を両側から手で押さえて圧迫を強める。
「ど……どうってっ！　く、ふ……ッ‼」

『第五章　温泉えっちはほどほどに』より

（――な、なんだよ、またっ！　少しは放っておいてくれたっていいだろ!!）

二人だけの雰囲気を台無しにされた気がして苛立ちを覚える。その和志の内心を察したかのように、瑠紅は右手はつないだままもう片方の手で胸を隠し彼と向かい合った。

「……雫姉か未來からもう聞いたんだよね？　御籠目さまのこと……。和志、霊感強いからいまも見てらっしゃるの、気がついてるんだよね？」

「あ、ああ……」

もういまさら二人とセックスしたことを隠しても仕方がない。気まずさと照れくささに顔を赤らめながらもこくりと頷く。従弟のその様に、瑠紅はなにかを決心したようだった。ギュッとつないだ手に力を込めると、そろそろと指をほどく。正面ににじり寄って正座を崩した姿勢で湯に沈んだ身体を、膝立ちに伸び上がらせてきた。

「御籠目さまの思し召しとか、お祖母さまに命じられたからとか、そ、そういうわけで仕方なくなんかじゃ、ないんだから……」

巫女服を纏わない腕が首筋に絡みついてきた。そのまま彼を引き寄せる。

「る、瑠紅……？　んむっ!!」

つんのめりそうになり彼女の裸の腰を抱き締めるようにしてしまう。衣服越しではなく直接触れられる刺激に打ち震える瑠紅の、桜色に綻んだ唇が和志へと押し当てられた。

立ち上る湯気にねっとりと潤んだ感触が脳裏を魅了する。元気すぎな行動力に閉口しここ数年避けてはいたが、元々は会うのが一年ぶりだろうと昨日遊んだばかりのようにじゃ

れ合うことが出来た一番気の合う従姉だ。いままで傍若無人な振る舞いに隠され気がつくこともなかった女っぽく可愛げのある態度を見せられ、和志の興奮が止まらなくなった。

くちゅ……。ちゅぱ……。むちゅ……。

「ん……ふぁ……。か、かじゅし……。あ……ふ……」

舌をそっと入れるとビクッと身を強張らせるが、すぐに瑠紅の方からも舌を差し出してきた。唾液の掻き乱される音色を湯音に紛れて響かせ、貪るように互いの舌を絡ませる。

（く……あ、キスッ、こんな気持ちいい……なんてっ！）

未來との唇だけを重ねた嬉し恥ずかしい純情なキスも胸を高鳴らせたが、常に本音をぶつけ合って遠慮なく接してきた小粒な従姉とはこの口づけこそがふさわしい。口の中で粘膜に包まれた部分が、物凄く敏感な感覚器官であることを思い知る。うねうねと軟体動物のように自在に蠢くその先で、少年は熱い吐息を喘がせる少女の口中を存分に探り回す。

「はわぁ……。ん……、は、ふぅ……」

次第に、にじゅっ！　ぐぢょっ!!　と、粘膜が絡み合う音がいかがわしさを増してくる。

「ひぅ……は、ああぁ……。きしゅ……しゅごぃ……かじゅしぃ……。――ンうっ!!」

溶け落ちてしまいそうな彼女を支えるように、抱き締める腕へと力を込める。彼女の小さな呻きと共に密着が増し、ささやかなサイズの膨らみが少年の胸板に当たった。

（あうっ！　瑠紅の、おっぱい……。ち、乳首、勃って……!?）

巫女服を着たままだったら気がつかなかっただろう。申し訳程度の膨らみの頂で固く強

張った小粒が直接に触れてしまっている。
（キスで……感じて、るんだ……る、瑠紅……ッ！）
そっと薄目で確かめると、彼女は瞼を閉じたまま夢見心地に蕩けていた。名残惜しい気持ちを抑えて唇を離すと、くちゅ……とヌメリを帯びた唾液が二人の間に長い糸を引く。
「あ……？　ん……」
突然失せた唇の感触に従姉がなんでやめるのと責めるような眼差しを送ってくる。その彼女から少し後ずさりながら和志は身を沈めるように屈み込むと、瑠紅の口中をとろとろにした舌を今度はその胸へと這わせた。
「――ひぃいうっ！　ふぁあっ!!　はンぁあぁうううっ！」
なだらかな山肌を舌の表面全体でざらりと舐め上げ、間髪入れずに窄めた先端に乳首を丸め込んだ。途端に、電流が走り抜けたみたいにミニマムな肢体が仰け反って震える。
「や、やぁあっ！　だめっ!!　そこ……おっぱい、は、恥ずかしい……からっ!!」
小柄な身体と並んで彼女の一番のコンプレックスだった。
姉はもちろんのこと妹にまで大きさで負けてしまった貧乳をしゃぶられ、恥辱に童顔が赤く染まる。両手で従弟の頭を突っぱねて押しのけようとするが、それよりも早く舌先が強張った粒勃ちを勢いよく転がす。
「――ひぃうんんっ!!　ふぁあぁぁ……はぁあぁぁ……ッ！」
瑠紅の身体が崩れ落ちた。カクカクと痙攣しながら湯の中にへたり込みそうになるその

腰を両手で抱き寄せ支えながら、和志はそれでも乳首舐めをやめない。

――れろっ！　むちゅっ!!　ちゅぱぁーっ！　くちゅくちゅくちゅ!!　ぺろれろんっ！

「ふぁっ！　は……ンぅっ!!　やぁっ！　だ、……だめぇっ!!　ば、ばかぁっ！　はふっ!!　はわわぁああっ！　お、おっぱいっ!!　だめっ、てばぁあっ！　ふわぁあぁっ!!」

窄めた舌で執拗に乳首を転がし、小さな乳輪をなぞる。突然に唇全体を密着させ、ちゅばちゅばと音を響かせて吸い上げ、引き攣った彼女の喉からか細い悲鳴を上げさせたその直後には、もう片方の乳首をちろちろと擽るように刺激して困らせた。

（ちっちゃい方が、敏感だって聞いたけど……。瑠紅、物凄い感じちゃってるっ！）

ほんの少しの刺激にも全身を仰け反らせて快感に喘ぐ。涎と涙を溢れさせ荒い息を弾ませ喜悦にむせぶ幼女のような従姉に少年の興奮がどこまでも昂る。微乳房に舌を這わせながら、和志はすべやかな彼女の肢体をまさぐり始めた。

腰を抱えた手を背中に這い上らせながら、もう片方の掌は括れをなぞって小振りな尻へと向かわせる。その瞬間、ピクンと警戒に瑠紅が強張るが乳首の突端を舌先で擽りながらむじゅーと吸い上げるとへなへなと脱力を取り戻す。

（うわ……おっぱいもちっちゃいけど、お尻もまだ子供みたいだ……）

ほとんど平坦に近い微かな膨らみの胸と違って、流石に房といえる程度の丸みはある。それでもゴムまりのような弾力に満ちた小振りな尻は、掌にすっぽりと収まってしまう程度の大きさだ。その熟し切らぬ果実に指をめり込ませ乱暴なほどに強く捏ね拉げる。

「ひゅあっ！　ひ、あ、はぁあっ‼　そ、それ……いいっ！　お尻ぃ、めちゃくちゃ、されるの……。ンっ‼　ふぁあはあぁ、と、とろけ……るぅ……ッ！」
すべすべな背筋を微震させ、ほぐされるような悦楽に瑠紅が甘い喘ぎを上擦らせた。和志の指に応じてしどけなく尻をくねくねと振りたくり、いちいち身を強張らせていた乳首への強すぎる快感にも、積極的に自分から微膨房を彼の口へと押しつけ求めてくる。
「ち……ちっちゃいけど、柔らかくて、でもぷりっぷりだ……瑠紅のお尻……」
「――ちっちゃい、いうな……ばかぁ。和志のくせに、生意気……ッ。ふぁあっ‼」
憎まれ口を叩きながらも揉み弄られる尻が迫り上がった。乳首を舌で転がし続ける従弟の頭を愛おしげに抱え、彼に見えなくなったのをいいことにめろめろな表情を浮かべる。
温泉の湯に火照った肌から、淫靡な汗の甘い香りが立ち上り少年を煽り立てる。どんなに拉げてもツンと上向いた張りのある形を取り戻す弾力房に夢中になり、和志の指が双房の割れ目へと潜り込む。指先に、固く窄まった蕾のような穴口が触れる。
「ひゃわっ！　ダメッ‼　汚いッ、そこっ！　――ば、ばかぁっ‼」
途端に瑠紅が我に返って慌てふためく。
「――はうっ‼　ご、ごめんっ！」
もう少し経験を積んでいれば、その部分も絶大な快感をもたらす箇所として楽しめただろう。しかしまだ未熟な二人にはそこは排泄の穴としてしか受け止めることが出来ない。
慌てて和志が指を退ける。驚いて尻を迫り上げた瑠紅の動きがその指先を導いた。

――ぬちぇぁッ!!

「――!!　はうっ！　ふぁっ!!　あ、あぁぁ――っ！」

柔らかな薄片が撫でるように触れる。ぬめった溝に指の第一関節までが埋まり込んだその瞬間、溶け崩れるような嬌声が瑠紅の喉から迸り、全身を震わせてしがみついてきた。

（あうっ！　こ、ここ……ッ!!　瑠紅の……お、おま○……こ……!?）

柔らかな少女の肉体のどこよりもとろとろに煮崩れた密やかな割れ目。手荒に扱えば、たちどころに壊れてしまいそうな危ういクレバスに指先をめり込ませてしまった。

肛門に触れてしまったときのようにすぐに離すべきか判断に迷う。

頭をギュッと抱え込まれしがみつかれているため彼女の表情を窺うことが出来ない。

ただ尋常ではない荒い息づかいが聞こえてくる。

おずおずと、ほんの少し、抜くでもなく押し入れるでもなく指先を蠢かす。途端、

「ひゃぁあんっ！　んぁあ、い、イィ……ッ!!」

拒絶の悲鳴ではなかった。思い違いでなければそれは瑠紅の歓喜の喘ぎ。そして柔らかく綻びた秘所の粘膜に、決して温泉の湯ではあり得ないヌメリを感じる。

「――瑠紅……。濡れて……る？」

「や……ッ!!　ば、ばかぁあっ！」

思わず口に出してしまっていた。発情を指摘された従姉が羞恥に慌てふためく。彼女の抱擁を逃れ顔を上げると困ったように眉根を寄せ頬を赤らめてはいるが、じっと見つめて

くる瞳がなにかを期待するかのように悩ましく潤んでいる。
「瑠紅……ッ!!」
左手で細腰を抱き寄せながら、和志は尻の側から股間に手を潜り込ませて女陰にめり込ませた右手の指先を、秘裂に沿って優しく掻き乱した。
「く……ふぅ……あ、あぁあぁ……っ！　すご……い、そこ、ぉ……ッ!!　気持ち……イ……ィ……っ、ふぁああぁっ！」
普段の意地っ張りな態度が嘘のように、甘えた嬌声が従姉の喉から溢れ返った。
(な、なんだよっ！　いつも、こうしてくれれば、可愛いのにっ!!)
そのいつもの様子とのギャップが激しいからこそ、より魅惑に感じると気づかず、少年がどうしようもなく胸を掻き乱してくる彼女への愛おしさに打ち震えた。
――にゅるっ！　くちゅちゅっ!!　ねちゅっ！　ぬるりゅ……!!
触れるほどに緩み蕩けてゆく神秘な谷間を、指先に陰唇片を絡ませ夢中で掻き乱す。
溢れ来る愛液の量が増し、絶えず脈打つ薄粘膜と相まって極上のヌメリを提供してくる。
「あ……あぁあっ！　なんで……っ!!　そんな、とこ、和志、に、触られて……ッ、き、気持ち……イイ……のっ!?　ふぁああっ！　はっ!!　あはぁああっ！」
ほとんど意識していないままに自分から腰をくねらせ、指先の動きに合わせ快楽を貪った。膝立ちの脚も一段と開帳し、少年の首筋に両腕を絡ませしなだれかかる。
(瑠紅が……えっちだっ！　えっちで、可愛すぎるッ!!)

愛液のヌメリを指先に絡ませ、粘膜に塗りたくるように女陰を刮(こそ)げ上げる。その中指の先が、牝割の上端で固く充血勃ちした小さな突起に触れた。

ビュクンッ！　とただ事ではない痙攣に瑠紅の小柄な肢体が打ち震えた。

「はひぃっ！　だ、だめっ!!　それっ、和志ッ！　だっ!!　だめぇえっ！」

そういわれてももう遅いし、拒まれても好奇心が抑えきれない。

（こ、これ……。クリトリ……ス……!?）

女性の身体でもっとも敏感な部分。女陰を弄っただけでもあられもなく乱れたというのに、それ以上鋭敏なここを刺激したら瑠紅はどうなってしまうのか。

思うよりも早く、和志は包皮から覗き出たその小粒の先端を容赦なく捏ねてしまった。

「――ひぎひぃいっ！　ふぁぁっ!!　はっ、はんぁあっ！　か、かず……しぃいっ!!　あ、ぁああ、なに、か、き、来ちゃうッ！　あ、ああぁ、あぁっ!!　やぁああ――っ！」

ガクガクと激しい痙攣に華奢な身体が波打った。無我夢中で和志の首筋にしがみつきながら瑠紅は切羽詰まった悲鳴をあられもなく振り絞って、陰核で弾けた悦楽を昇り詰める。

じゅぷっ!!　ぷじゅじゅっ！　びゅびゅるっ!!

和志の指先をぬめらせる潮液を股間から湯の中へ溢れ返らせ、瑠紅の硬直した身体が崩れるように脱力してゆく。

「かず……しぃ……。は……あ……好きぃ……。あたし、和志、好き……だから……」

その弛緩した身体を優しく抱き寄せると、耳元で囁くように甘い想いを告げてくる。

「お、俺だって……瑠紅のこと……好き、に、決まってるっ！」
雫や未來への想いが嘘なわけじゃない。三人共、和志にとってはかけがえのない誰よりも大切な女性たちだ。誰か一人ではない。三人誰一人欠けてもだめなのだ。この気持ちを、瑠紅ならば、そして雫も未來も分かってくれると信じて、溢れ来る感情を言葉に伝える。
「はぁ……ン……。かずしぃ……!!」
華奢な彼女の身体を抱え上げ、しっかりと抱き締めながらゆっくりと下に降ろしてゆく。彼女の童顔が期待と不安の眼差しで見つめてくる。眼差しを絡め合い吐息が弾むなか、
――ぬぶ……っ！
いきり立った怒張肉の先端が、指先に掻きほぐされた花蕾にめり込む。
「っはンッ!!」
ぱっちりとした瞳が丸く見開かれ切羽詰まった色に染まる。少年の首筋に回された手にぐっと力がこもり、上擦った呻きを漏らしながら瑠紅は潤んだ視線を向けてきた。
いままでだったら彼女を気遣っただろう。本当にいいのか、などと再確認したり、破瓜の痛みを案じて、瑠紅の思いをはぐらかしたに違いない。山小屋での、お互いに本音を強がりで偽ったやりとりが脳裏をよぎる。だから和志は、ヌルヌルに潤みまくった本音の女陰へと、そのまま痛いほどに剛直したペニスを躊躇いなく突き入れる。
――ずにゅっ！　にずずっ!!
「ひぃうっ!!　は……ううっ！」

狭膣の口に切っ先がめり込み無理矢理に押し広げながら埋まりゆく。すでにキュンキュンと締めつけてくるその肉洞をいくらもいかぬ内に、早速処女膜が立ちはだかる。

「――い、痛……ッ!!　やっ、和志ッ！　痛い、からっ、ちょっと、やめ……ッ!!」

衝撃に華奢な身体が硬く強張って、蕩けていた童顔がしかめられる。

（瑠紅を……お、俺のものに、するんだっ！）

下手に戸惑って余計に痛い想いをさせる方が可哀想だ。だから容赦なく彼女の括れ腰をギュッと抱き締めながら、和志は股間を一気に迫り上げた。

ヌ……ッ、ぶぢぃいっ!!　ズッ、ブッ！　ぬぶずぶずぶぬずずぅうっ!!

「――ッぅううっ！　くっ、ああっ!!　ひぃあああぁぁうううぅ――――ッ！」

大きな瞳を潤ませていた涙が溢れ返って流れ落ちた。仰け反った背筋を大きく震わせながら、未通だった穴膜を突き破ってめり込んできた極太の痛みに瑠紅が耐える。

「く……ふぁ……。は、挿入った……」

小柄すぎる身体同様狭く未熟な膣穴が、先端から根本までを出てゆけといわんばかりに圧迫している。温かく柔らかで窮屈な肉洞に男根がすっぽりと包み込まれたこの瞬間でなければ味わえぬ充足感に大きな吐息が溢れ返る。その従弟の心地よさそうな様に、瑠紅がムッとした涙目で睨みつけてくる。

「い、痛いっていってるのに……酷いじゃない……もう……!!」

恨めしそうにムッと唇を尖らせる。その表情が余りにも可愛らしくて込み上げる笑みを

我慢するのに必死になった。
「ご、ごめん……。でも、ほら、瑠紅の膣内……挿入ったから……」
その状態を確認するように腰をクイっと突き上げて彼女の膣奥を刺激してみせる。
「――はぅんッ！　は……ぅふう……。ば、ばかっ!!　なにすんのよッ！」
怒り顔が切なくしかめられ、ビクンと全身を打ち震わせびっくりしたようにしがみついてくる。慌てて不機嫌そうな表情を取り戻そうとするのだが、気持ちよかったことを証明するかのように目元も口元も緩んでしまっていた。
「……瑠紅、可愛い」
しがみついてくる彼女をギュッと受け止めながら思わずつぶやいてしまっていた。
「え、ええっ!?　ばかっ、なにいって……ンうっ!!」
途端に顔を真っ赤にしそんなおべっかで誤魔化されないと突っぱねようとする瑠紅だが、身体が正直に喜んで襞がギュンと収縮し怒張肌に絡みついてきた。さらには熱い愛液の飛沫を膣奥からたっぷりと溢れさせてくる。
「いまだって、おま○こすごく締まったし。瑠紅、ちんこ挿入れられて気持ちいいんだね？」
口ではどんなに強がっても真正直に身体が応えてしまう彼女が可愛くて、ちょっと意地悪してみたくなる。ペニスを根本までくわえ込んだ彼女のヴァギナがどんな反応を示しているのかを伝えてやって、もっと瑠紅を恥ずかしがらせてやろうとした。

「そんな……はンっ！　ふぁあっ‼　あ、あぁあああっ！」
効果は覿面だった。襞の一筋一筋が波打つようにヴァギナが波打って男根を絞り上げてくる。複雑に織りなす肉畝に亀頭から根本までをヌメヌメと這い回られ、和志の下腹に熱い衝動が膨れ上がってきた。
「あ、はぁ……ッ！　瑠紅の膣内ッ、気持ちいい……っ‼」
正面から彼女を抱え上げ、湯の中に腰まで浸かってつながり合ったまま、その歓喜に任せて少年が勢いよくストロークを繰り出す。
——ぬぼっ！　ぐぢゅっ‼　ずっぶっ！　ずんむっ‼　んぬずっ！
「ふぁあっ！　や、やあっ‼　そん……な、動いちゃッ！　ひぃいううっ‼　はふっ！　あ、ああ、奥ッ、当たってるっ‼　和志の……イッパイッ！　ふぁああ、イイッ‼」
初めての刺激に驚き戸惑い、身体を硬くしてしまうのだが、膣穴を太い棒肉が出入りする感触はきらいではないらしい。ましてやどんなに鬱陶しがられようとも毎年押しかけて会いに行った従弟に貫かれているためか、悩ましく喘ぐ瞬間の表情が喜悦に満ちている。
（瑠紅が……こんな顔ッ、するなんてっ！　俺にちんぽ入れられて、感じちゃってるっ‼）
深くまで突き入れると亀頭の先が当たる丸壺がコンコンと弾かれ乱暴に拉げる。途端に瑠紅の狭穴が激しく怒張幹を締めつけてきた。
「それ……ッ、おかしく、なっちゃう……くふぁあぁぁんっ！」
鼻にかかった媚声を漏らして、イヤイヤと首を振りたくり従姉が訴えてくる。

「でも、瑠紅の、おま〇こ、気持ちよさそうに絡みついてくるんだけど……」
つい意地悪な言葉でからかいながら、ストロークの速度を上げてぐちゅぐちゅに濡れ乱れたヴァギナを激しく掻き回す。
――じゅぶじゅぶぬじゅっ！　ぐじょんっ!!　ぬじゅぶっ！　ずぐぶんっ!!
「ひぁああっ！　やッ……ぁああっ!!　だ、だめっ！　ん、ふぁあ……かずし、イジワルぅっ!!　そ……んな、されたらっ、もうっ！」
子宮に怒張を激しく打ち付けられるたびに、華奢な肢体がガクンと崩れるように痙攣し、必死に両手でしがみついてくる。膣内に溢れ来る愛液はみっちり埋まった男根との隙間から湯の中へと流れ出てヌルヌルとつながり合った股間の辺りを漂う。そのぐちゃぐちゃな潤滑の中にあって、狭膣は相変わらず窮屈に勃起肉を握りしめて浮き立つような快感をもたらしてくる。その甘美だけでも十分なのに、弱音を吐く瑠紅が可愛らしすぎた。
（瑠紅が……ッ、俺に、泣き言なんてっ!!　はうっ！　こっちも、もう……っ!!）
眉根を寄せて恨めしげに上目遣いに睨まれただけで、熱い衝動が急激に下腹から迫り上がってきた。波打ち続ける膣襞に裏筋を絞られ、突き込む勢いがますます激しさを増す。
温泉の水面に飛沫を立てながら、細腰を強く抱き寄せて子宮を突き攻める。
「く……ッはぁあううっ！　あ、ああっ、だめってっ、ってる……のにぃっ!!　ふあああぁ、来ちゃう……っ！　なんか……あ、ああっ、はぁあ……っ、来るッ!!　イクぅううっ！」
泣き声のように上擦った嬌声で快楽に乱れる。くねりながら捩れた細い肢体の、膨らみ

『第六章　誰にしようか、巫女三姉妹』より

「な、泣いてる……んだよな……？」
「う、うん……。でも、なんか超怖いッ！　あ、あたしちょっとちびっちゃったかも……」
「ボ、ボクもです……。雫ねえさまが泣くの初めてみたけれど……こ、これは……」
ぐずぐずと鼻を啜ろうとも澄ました表情が微塵も崩れぬその異様さに、どうやらほんの少し失禁してしまったらしく、瑠紅と未來が袴の前を両手で押さえて頬を赤らめる。
「わ、わらひ、かじゅくん、気味悪がるて……思って……。だから、御籠目さまのこと、少しずつ打ち明けてこうね、って……。うぐっ……。で、でも、さっき……話しちゃったから……。変な女って、かずくんに、きらわれた……思って……」
なんかもう、どこからツッコんでいいのやら途方に暮れた。彼女の素の性格の変さ加減に比べると、御籠目さまに関する事柄など正直いって些細なことにしか感じない。
それでも、それも含めて、雫のことが好きなのだからどうしようもない。
でもまあ、無表情で泣きじゃくりは、なまじ美人なだけにちょっと恐怖を感じてるし、アップはかなり限界ギリギリ、と思いながら優しくしなやかな身体を抱き締めた。
「俺だってみんなと同じ血が流れてる籠ノ目の一族だよ。そんなことで変だなんて思ったりきらいになったりするわけないから。それに、悩んでいたのはこのことじゃないし……」
頬に伝う涙を指先で拭い、初めて弱さを見せた初恋の人をなだめる。そして本当に心を悩ませている問題に溜め息を漏らし和志は、ハッと注目する従姉妹たちに打ち明けた。
「始めはかなり驚いたよ……。いきなり雫姉に迫られて。でも前から雫姉のこと好きだっ

たから、このまま雫姉と恋人になれたらって思ったりして、わくわくして……俺……」
雫と初めて睦み合ったときのことを思い返して打ち明けると、彼女の表情が晴れ渡る。
それと対照的に妹たちの表情が暗く強張った。
「だけど、未來とも瑠紅ともエッチして、それにいままで知らなかったみんなの普段を知って、俺……。さ、雫姉だけじゃなくって、瑠紅も、未來も、好きになっちゃって……」
浮気などではなく三人とも本気中の本気で好きになってしまった。なにを調子のいいことをと思われても仕方がないが、自分でもどうにもならない本当の気持ちなのだ。
「だから俺、一人になんて決められないよ！　時間が経てば一番好きなのは誰なのか分かるのかと思ったけど、時間が経つほどみんなのそれぞれが好きになって……。だ、だから、雫姉も、瑠紅も、未來も、俺には一人だけなんて選べない大好きな人だからっ!!」
偽りのない、真実の思いだった。けれどもこれで愛想を尽かされても仕方がないことは分かっている。ふざけるなと、勝手な言い草を罵られ、きらわれても当然だろう。
だめで元々な告白をし、拒絶されたら潔く諦めようと自分の心に言い聞かせたのに、みっともなく鼻の奥から熱いものが込み上げてきてしまう。
「和志の、ばかぁあああぁっ！」
「かずにいさまぁ――ッ!!」
「あら……」
瑠紅と未來が勢いよく飛びかかってきて、雫もろとも和志を居間の床に押し倒した。

「おわぁっ！」
抱きついていた雫の美乳が一段と密着し胸の上でぷにゅんと拉げて温かな心地よさをもたらす。その左右から妹巫女たちがむしゃぶりついてきて、甘やかな香りと柔らかな感触の中に和志を包み込んだ。
「な……？　未來、瑠紅……ッ！　あう、雫姉までっ‼」
何事かと戸惑うなか、瑠紅が赤みがかった髪の頭をぐりぐりと頬に押しつけてくる。
「……なによ、そんなことで勝手に悩んじゃってっ、バカじゃないのっ⁉　あたしだって和志のこと大好きで、独り占めしちゃいたいくらいだけど、同じくらい大好きな雫姉と未來もあんたのこと好きなの知ってて、そんなこと出来るわけないんだからっ！」
「え……？」
三つ編みの次女巫女に罵られ呆然としていると、反対側の頬にそっと青髪のおかっぱ頭を擦り寄せ未來が恥ずかしげに告げる。
「かずにいさまが、ボクだけを選んでくれたら、それはすごく嬉しいけど……。でも、ねえさまたちの気持ち、知ってるから……心から喜べないです……。でも、かずにいさま、ボクたちみんな好きっていってくれて……やっぱり、かずにいさま、大好きっ‼」
思いも寄らなかった彼女たちの反応に面食らい、彼女たちの巫女装束に包まれた肉体の火照りに胸を高鳴らせる。
「他の女の子とだったら、許せないけど……。瑠紅と未來なら……わたしも嬉しい……」

雫はいつも通り無表情な、だが和志と妹たちにはこの上ない喜びを湛えていると分かる美貌で身を起こすと、後ずさりながら前屈みになる。

「雫、姉……？　おわっ、ちょっとっ！」

瑠紅と未來を抱き止めていて手が塞がっている無防備な和志のGパンのジッパーを雫はあっという間に引き下ろしてしまった。

——びゅるんっ‼

湯上がりに立ち上った従姉妹たちの甘く軽やかな体臭を嗅いだ瞬間から、もう勃起が抑えられなくなっていた。正面からのしかかっていた長女巫女の下腹に密着していたため、彼女には気づかれてしまっていたのだろう。

「はぁ……。かずくんの、おちんちん……。わたしたちのこと考えて、こんなに……」

幾本もの青筋を浮かび上がらせ赤銅色に染まって反り返った肉幹が、高々とそそり立った鏃（やじり）から早くも先走りの汁を垂らしている。少女たちのさわやかな香りを汚して、立ち上る生臭い牡臭に雫は生唾を飲み込むと、おもむろに亀頭の先をぱっくりと咥え込む。

「——‼　くふぉあはっ！　し、しずく……ねえ……ッ‼」

ねっとりと唾液に潤んだ唇は煮えるように熱く敏感な先端を包み込む。染みるような歓喜の衝撃に息を詰まらせていると、舌の先が雁溝をなぞり、裏筋を擽ってくる。

「ああっ！　雫姉ッ‼　また抜け駆けしてッ！」

「か……かずにいさまの、お……おちんちん、口でッ‼」

視界が白く染まり快感に腰が迫り上がる中、瑠紅と未來までもが遅れてなるものかと怒張に唇を押し当ててくる。
「ほぁあっ!!　んはぁっ！　く……ふ……ッ!!　さ、さんにんで……なんてっ！」
幹肌を左右から、それぞれに舌を這わせられた。瑠紅は少し大胆に根本から雁首まで、未來はおずおずと窄めた先で擽るように陰茎を舐めしゃぶる。
仰向けになった和志の股間へと美に恵まれた顔を埋め、尻を高々と突き上げて膝立ちに蹲(うずくま)る。雫と未來は白い足袋履きの、瑠紅は黒ニーソを履いた足を蠢かせるたび、それぞれの特性を表した青、赤、緑の袴が揺れ艶めかしい太腿を覗かせた。
――ぬちゅ、にちゅっ！　くちょん……!!
「んふ……かじゅしの……ちんちん、熱くひぇ、やけろ、ひふぉう……」
――ちょろ……。んむ……ちゅ……。ぺろ、れろれろ……はむん……！
「いっふぁい、筋……浮き出てまひゅ……。にいひゃまの、おひんひん……。んふ……」
カウパーにまみれた幹竿の味を堪能するように熱心に音を立てて、瑠紅が何度も舌を這わせてくる。その反対側では未來が熱い興奮の吐息とともに舌先で幹肌の感触を確かめるように舐め捏ね、時折大胆にしっとり柔らかな唇で甘噛みしてきた。
「気持ちいいッ！　三人で……舐めッ、はうぁあっ!!」
そして一番敏感な箇所を一番先に確保した雫の唇が、大きく張り出た肉傘の裏側を少し窮屈に締めつけ、尿道を穿るように舐め続ける。

「あふ……かじゅくんの、いっふぁい……お汁……溢れてくゆ……ふぁ、舌止まやない」
——ぬぎゅっ！　にびゅっ!!　くぢゅぢゅっ！　ちゅぱぁ——ッ!!　ちゅずっ！
「ふ……あ……はぁあっ！　雫姉ッ!!　そ、そんな、吸っちゃッ！　あぐうっ!!　瑠紅のも、未來のも……な、舐めるの……んうっ！　気持ち……よすぎっ!!」
腰の細かい痙攣が治まらなかった。そこだけやたらと力んでしまうのに、他の身体の部分はへなへなに脱力して快感のなすがままにされる。
（三人でッ、いっぺんに舐めるっ、なんてぇっ！　くぅううっ、舌が、ちんこ中にっ!!あうっ！　はううっ!!　気ひぃういっ、気持ちイイィぁああぅううっ！）
快楽の逃げ場がなかった。
「かじゅくん、ここ、気持ひイイのね……しゅごい、ねっとりしへきたぁ……」
きゅむきゅむと張り出したカリを断続的に唇で圧迫しながら、尿道を舌先で穿って絞り出したカウパーを雫が裏筋にゆったりとした動きでなすりつけてくる。
「あぁっ、ぐぅううっ！　も、もうっ、俺っ!!」
むず痒い熱が海綿体を満たし付け根から込み上げるものが弾けそうだというのに、幹肌を上下に捏ね回す妹巫女たちの舌使いが我慢する気力を呆気なく挫く。
——ぬちょ、ねちゃっ！　じゅぷぷっ!!　にゅず……っ！
「かじゅしったら、ふぉんな硬々にしひゃっへ。あたひに舐めらえへ、気持ひいい？」
「にいひゃま、ひくひくっへ、震えへ……可愛い、れふ……」

瑠紅にからかわれるのは慣れているが、未來にまでどうしようもない勃起肉を可愛がられ、情けないはずなのにゾクゾクと得体の知れない興奮が膨れ上がってしまった。
「こ……ッ、こんなっ！　んはぁううっ!!」
たるたるに緩んだ陰嚢を一つずつ仲良く指先で弄びながら、痛いほどに充血した極太を二人の舌先が先端へと向かって舐め昇る。同時に、熱く湿った吐息を吹きかけながら雫の唇が亀頭を解放し、裏筋から根本へ向かって舌先で舐め下ってくる。
「ひぃいうっ!!　あふぁううっ！　そ、それ……ッ!!　はぁううっ、出ぇえっ！」
真逆の方向に向かう快感の流れが怒張の中ほどですれ違い、さらに膨れ上がった剛直幹が激しく打ち震える。マグマのようにぐつぐつと沸き立っていた灼熱の衝動が、和志の視界を真っ白に染めながら怒濤の勢いで尿道を走り抜けた。
「くふぁああぁううっ!!」
――どっっっびゅぶるぅううっ！　ぶびゅっ!!　ぶびびぶびぃィイイィィッ！　びゅっ!!　びゅばっ！　びゅっ、ビュッ!!　びゅるるぅ――――ッ！
「あふっ!!」「ほわぅっ！」「きゃうっ!!」
激しい打ち震えに導かれ極太の切っ先から噴き出した白濁の奔流に、三姉妹が声を揃えて驚嘆した。下品な音色と噎せるような脱力臭をぶちまけて飛び散る大量の熱滴が、舌をだらんと垂らして惚けた少女たちの顔面に容赦なくべちょべちょとへばりつく。
それだけに収まらずいつまでも弱まる気配もなく噴き上がり続けるその精液は、風呂上

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／本体690円(税込)

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 参

信玄、出陣！

［小説：斐芝嘉和／挿絵：SAIPACo.］

全国書店で 好評 発売中

織田〈希莉香〉信長、最大の危機!?

戦国武将の名を持つ美少女達が淫らに大バトル!!

BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜

［小説：夜士郎／原作・挿絵：渡瀬行人］

全国書店で 好評 発売中

吸血姫と狩猟者二人の影が闇を斬る

隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画が待望のノベライズ!!

ピルグリムメイデンⅡ 白装の騎士

［小説：狩野景／挿絵：ほたて］

2010 3月 下旬 発売予定!!

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!

ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ ①〜②
- 思春期なアダム ①〜②
- 絢爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
- 借金お嬢クリス ①〜②
- プリンセスリバーシ!! 交錯する美姫と魔姫
- 無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- ピルグリムメイデン 深紅の巡礼聖女

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 『ミルフィーユ』ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!